文化庁月報

No.473
2008年2月号

CONTENTS

文化の交差点　青木 保・文化庁長官対談　第7回　ゲスト 谷村新司さん●シンガーソングライター、上海音楽学院教授
音楽文化は心の文化……4
長官コラム　青木保のカフェ・アオキ……8

特集　日中文化・スポーツ交流年2007　中国との文化交流
文化庁提言　「日中文化・スポーツ交流年」を終えて……田村寿浩・10
寄稿　交流をとおして、理解を深めよう……張愛平・11
報告　日本からの春風……立松和平・12
事例紹介　日本の「今」を中国で紹介……長官官房国際課・13
報告　メディア芸術祭　上海展に参加して……児玉幸子・15
事例紹介　映画祭、日中政府による相互開催への進展……文化部芸術文化課・16
報告　北京の観客が心酔した日本舞踊と邦楽の共演……古賀司郎・18
寄稿　北京で見る「日本映画」……横井理夫・21

連載
いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート71
高知県立美術館……22
芸術文化の風 35
映画・映像の読み方(佐伯知紀)……23
著作権Q&A　『著作権なるほど質問箱』から 35
著作権の帰属ほか……24
言葉を見つめて 11
言語活動を支援するソフトウェアの開発……25
伝建地区を見守る人々　伝建歳時記 47
八女生まれのお雛様を訪ねて(福岡県八女市)……26
天然記念物の保護管理の現状 11
天然記念物アユモドキの保護・保全啓発の取組……28
広げよう「文化力」の輪！ 23
躍動する日韓の若者文化交流を促進！……30
こどもの文化体験 11
自然を尊重（島根県益田市）……31
日本の伝統美と技を守る人々　重要無形文化財保持者編 20
若林英次(芸名 寶山左衛門)(長唄鳴物)……32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法　文化財鑑賞の手引き 59
絵巻の断簡……33
祭り歳時記　伝承を支える人々 23
戸沢のねじ行事(長野県上田市真田町戸沢)……34
文化交流使の活動報告 39
盆栽は世界をつなぐ(中村　享・盆栽作家)……35
文化でまちづくり　明日への文化振興ビジョン 11
いばらき文化振興ビジョン……36

花だより
平成19年春秋叙勲・褒章受章者の決定……38
平成19年度文化庁長官表彰被表彰者の決定……41

イベント案内
国立新美術館
アーティスト・ファイル2008　現代の作家たち……42
東京国立近代美術館
所蔵作品展　近代工芸の名品　花と人形……42
国立国際美術館
エミリー・ウングワレー展　アボリジニが生んだ天才画家……43
京都国立博物館
特集陳列　雛まつりとお人形……43
奈良国立博物館
特別陳列　お水取り……44
東京国立博物館　黒田記念館
特集陳列　写された黒田清輝……44

新国立劇場スポットライト……45
3月の国立劇場……46
芸術文化振興基金ニュース……47

今月の表紙
日中国交正常化35周年記念：
日本伝統芸能中国公演「男女道成寺」（上）
「文化庁メディア芸術祭　上海展2007」テープカット

題字デザイン　桑山弥三郎

◆文化庁提言◆

中国との交流「日中文化・スポーツ交流年」を終えて

長官官房国際課
国際文化交流室長
田村寿浩

文化芸術は人々の心と心を結びつけるものであり、背景や経緯を異にする各国、各民族がお互いの文化を理解し、尊重し、多様な文化を認め合うことにおいて重要な力を発揮します。このため、文化芸術の国際交流を積極的に推進し、文化を通じた国際貢献を進めることが求められています。

これを受け、文化庁では、二一世紀は国際的な文化の時代と捉え、日本文化の発信および国際文化交流の推進に努めてきております。主な取組として、さまざまな国際的な文化活動を支援する施策を実施しているほか、我が国と諸外国の政府間で設定する「国際交流年」を活用し、関係省庁等と連携し、両国の文化を幅広く相互に紹介し合うよい機会として、積極的に交流事業を実施・支援してきております。

特に昨年は、日本と中国の国交の正常化三五周年に当たり、「日中文化・スポーツ交流年」として、双方の国で数多くの交流事業が展開されました。日本側だけで三〇〇件近くの事業が交流年事業として登録され、さまざまな事業が政府・企業・市民レベルで開催され、かつてない規模で活発な交流がなされました。

文化庁でも、中国政府との共催により、さまざまな事業を実施したり、中国で公演を行う日本の舞台芸術団体に対して幅広く支援したりするなど、中国との文化交流を積極的に推進しています。主なものとして、まず「文化交流使」として作家の立松和平氏を約一か月間、中国に派遣しました。また、日中政府共催で双方の国において「映画祭」事業を開催したほか、八月には上海市との共催で、日本の選りすぐりのメディア芸術作品を総合的に紹介する「文化庁メディア芸術祭　上海展２００７」を同市にて開催しました。さらに一二月には日本伝統芸能の北京公演を行うなど、さまざまな分野での交流事業を主催、支援してきています。

昨年一年間に日中両国間で開催されたさまざまな交流事業を通じて両国の友好関係がいっそう強固になったものと確信しています。日中間の相互理解を図るうえで、文化交流はたいへん重要であり、文化庁としては、昨年の「交流年」を機に盛り上がった交流の機運を一時的なものに終わらせることなく、今後も中国との文化交流の促進に努めていきたいと考えています。

—寄稿—

交流をとおして、理解を深めよう

中華人民共和国
大使館公使参事官
張愛平

中日文化・スポーツ交流年が終わりを迎えました。まずこの場をお借りし、交流年の諸行事に参加し、貢献してこられた中日両国各界の友人の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

この一年間、三〇〇余りの多種多彩なイベントが活発に行われました。四月に中国無形文化遺産の特別公演を東京で初演し、古琴、昆曲、新疆ムカム、モンゴル族の長調民歌など芸術の集大成となりました。簡潔で文化含蓄に富む公演は、多くの日本観客に感動を与え、奥深い中国文化を新たに印象づけました。一一月の締めくくりに、中日両国の子どもたちによる総合公演が東京で開催されました。中国の京劇、雑技など、長い歴史で培われた素晴らしい文化を子どもたちの初々しい身振りで表現し、また、日本の子どもたちがでんでん太鼓を揺らしてそれにこたえました。子どもたちの鮮やかな演技に、会場から惜しみない拍手が送られ、感動的なシーンが続きました。

中国国民も日本文化を満喫しました。昨年三月、一一月のスーパーライブは、日本最前線の流行文化を伝え、北京会場は若者の熱気に埋まったそうです。九月の日中祭りは北京王府井に中日八〇〇人共演で奥深い日本伝統文化を披露し、一〇万人の観客を魅了しました。ほか、スポーツ交流、青少年の相互訪問、映画祭の相互開催など、多くの印象深いことがありました。

昨年は地域や分野、世代を超え、幅広い交流が数多く行われました。その中で感動、興奮、鼓動を覚え、いくつもの友情と信頼を生み親近感を持ち合えたのではないでしょうか。文化・スポーツ交流年は、まさにそれを目途としていました。文化とスポーツの交流はせせらぎのように人々の心を潤し、長くみずみずしい友好の情を生むことができたでしょう。この交流年に蒔かれた種は、やがてしっかりと根を伸ばし、中日両国の相互理解を支えるものとなるはずです。

二〇〇八年は、中日平和友好条約締結三〇周年であり、北京オリンピック開催年でもあります。「中日文化・スポーツ交流年」で盛り上がった両国の交流の勢いが、さらに発展することを期待しております。また、新しい中日両国の相互理解と戦略互恵関係をいっそう充実させ、交流史上に輝かしい一ページが新たに加わることを信じます。まさしく交流年キャッチフレーズのとおり「期待を未来へつなげよう」。

報告

日本からの春風
「文化交流使」中国派遣

作家
立松和平

文化交流使として中国に行き、一か月以上一年以内中国に滞在し、できるかぎり文学者たちと会い、できるかぎりの大学生と教員たちに講演をする。それが文化交流使としての私に与えられた使命である。中国ではつい先日まで反日デモが吹き荒れ、対日批判も激しかったので、私に不安がなかったということはない。単なる観光客ではない以上、私は不安の中で中国に行ったのである。

中国・遼寧大学での講演

私には長いこと友情を温めてきた中国の友人が何人もいる。日本でも中国でも様々な事件があり、お互いの国の関係がぐらついた時代もあったが、ゆっくりと時間をかけて育ててきた個人の友情はまったく揺らがない。その友人が今回も私を受け入れてくれるから、私に不安はなかったのである。

中国作家協会は全中国をカバーする文学者たちの巨大な組織である。アジア・アフリカ関係の部長をつとめた陳喜儒さんが三月で定年になり、私は五月に中国に行くことにしていた。ちょうど時間ができた陳さんが、全行程付き合ってくれることになった。顔の広い陳さんが乗り出してくれたおかげで、交流使としての私の仕事は成功が約束されたといえる。

実際に書けるかどうか未知数なのだが、私には旧満州国を素材にした壮大な小説の構想がある。どうせ行くならと北京から吉林、長春、瀋陽、大連とし、私の父が若い時に暮らした済南も訪問地と決めた。陳さんも東北の人で、得意な地であることも私には幸運だった。

陳さんが連絡しておいてくれたので、私は効率よく作家たちに会うことができた。どこの土地でも大歓迎を受け、先方の用意した熱烈宴会で酒を酌み交わした。こうして宴会で歓迎するのが、中国のやり方である。毎晩の熱烈宴会でさすがに疲れたが、話のほうはよくはずみ、交流使の役割は充分に果たすことができた。心配した反日感情など全く感じなかった。

「日本の作家がきてくださって、春風が吹いてきたように温かく感じています」

ある地方で私への歓迎の挨拶の折に聞いた言葉だ。この言葉に全てが集約されているのではないだろうか。

事例紹介

文化庁メディア芸術祭　上海展
日本の「今」を中国で紹介

長官官房国際課

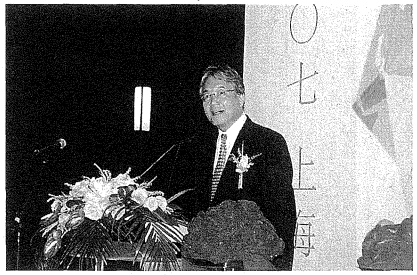
日中国交正常化35周年記念
「文化庁メディア芸術祭　上海展2007」

●会期：平成19年8月19日(日)～26日(日)
●会場：上海都市彫刻芸術センター

文化庁は，上海市文化広播影視管理局との共催により，上海市にて日中国交正常化35周年を記念し，「文化庁メディア芸術祭　上海展2007」を開催しました。

文化庁と上海市文化広播影視管理局は、日本のアニメやゲームなどのメディア芸術を紹介する「文化庁メディア芸術祭　上海展2007（中国語表記：2007上海日本新多媒体動漫芸術展）」を、CG-ARTS協会、上海市対外文化交流協会との共催により開催しました。本展覧会は、近年の文化庁メディア芸術祭で受賞した日本人作家による優秀作品九六点を展示し、アートとエンターテインメントや、先端技術と感性の融合によって実現した作品群を通じ、中国の特に若い世代に「日本の今」を紹介することを目的としたものです。

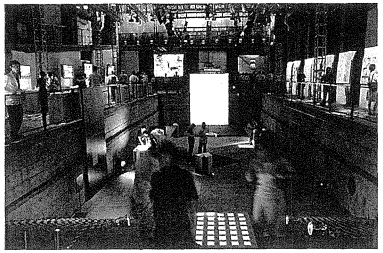
池坊文部科学副大臣，唐上海市副市長と内覧


青木文化庁長官による開幕宣言

会場は、Aゾーン「地球」、Bゾーン「東京」、Cゾーン「表現」の三つのゾーンで構成され、Aゾーンでは、平川紀道氏の作品『GLOBAL BEARING』などにより、観覧者がネット上で流れる膨大な情報の波や地球の大きさを大型スクリーンで体感できるようになっており、Bゾーンでは、小林和彦氏による作

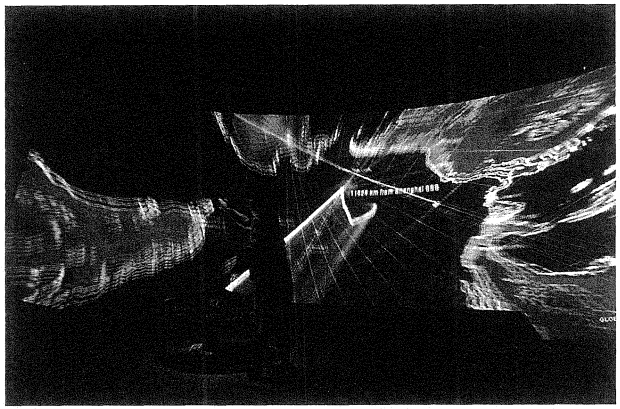
品『Gate Vision』など、東京までの新幹線の車窓風景をコンピュータで円形に処理した画像や、東京の日常生活や空撮影像が壁一面に展示され、都市空間「東京」を体感できるスペースとしました。最後のCゾーンは、日本の現代メディアアートを紹介するエリアとして、児玉幸子氏の『モルフォタワー・二つの立てる渦』など、選りすぐりのアート、ゲーム、フィギュア、マンガ、アニメーションの作品を一堂に展示しました。

前日一八日の開幕式には、日本側より池坊保子文部科学副大臣、青木保文化庁長官、中国側からは、唐登傑上海市副市長等が出席しました。式典では、池坊副大臣、唐副市長からの代表挨拶に続いて青木長官の開幕宣言があり、その後隈丸優次在上海日本国総領事等の主賓によるテープカットが行われ盛大に開幕しました。


元工場を改装したモダンな上海展会場（彫刻芸術センター）

八月二六日までの開催期間を通じ、三四五〇名の来場者がありました。来場者からは、「もっと作品や日本のことを知りたいと思うようになった」「日本に親近感をもつようになった」「東京はきれいな街だと思った。ぜひ行ってみたい」「出展アーティストと接することができて刺激になった」などの感想が寄せられました。

また、「文化庁メディア芸術祭　上海展２００７」の公式サイト（http://plaza.bunka.go.jp/cn/／日本語・中国語）には、開催概要のほか、作品やアーティストの紹介記事を掲載し、平成一九年一二月現在一〇万件ものアクセスがありました。また、新聞記事として国内一八件、中国一五件掲載されるなど、両国のメディアにも反響がありました。

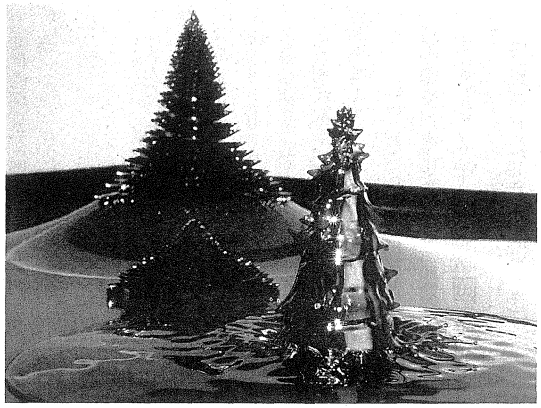

平川紀道氏の『GLOBAL BEARING』

小林和彦氏の『Gate vision』

報告

メディア芸術祭 上海展に参加して

電気通信大学准教授，
メディアアーティスト
児玉幸子


児玉幸子『モルフォタワー・二つの立てる渦』2007年，技術協力：宮島靖（Sony CSL）／電気通信大学技術部，音楽：山田真由美／日高哲英，協力：出田修，加須谷恭子

八月一九日から二六日まで「文化庁メディア芸術祭　上海展」が開催され、CG―ARTS協会のスタッフ、他の作家たちと共に展示メンバーの一人として参加した。五年前、日中国交正常化三〇周年を記念した「メディア芸術祭北京展」の為に中央美術学院美術館を訪れて以来だ。

会場の上海都市彫刻芸術センターに着くと、複雑にトラスが組み上げられる最中だった。液晶プロジェクタやライトの数にまず驚いた。にぎやかな展覧会の演出は、ネオンサイン鮮やかな上海の外灘の風景と重なる。

庭園の巨大なポスターには「新多媒体动漫艺术」の文字が。日本での「メディア芸術」の雰囲気が伝わるよう中国語に翻訳したのだそうだ。展示ガイドは、中国の対外交流協会が募集した若者たち。大学生だったり、日本のアニメが好きという若者だ。ガンダムは「高達（ガンダム）」の名で呼ばれ、上海ではだれでも子ども時代に親しむキャラクターだと教えられた。

私の作品は、工業用の液体素材である磁性流体を使ったインスタレーション。テーブル上の皿に、磁性流体が入っている。中ほどに、高さ一五cmのらせん形の二本の塔が立ち、音楽に合わせて塔の表面に流体の棘がダンスする。鏡のような表面の波紋が重なり合って動く様子は、未知の惑星、未知の生物のよう。作品は、奇岩を組み合わせた上海の庭園にも通じる。限られた空間に複雑な表情をもたせて無限の空間を想像し、皿の中に、現象（雲、渦、海洋）を載せて眺めるように作った。

展覧会では、集中して作品を見つめる若い観客の様子に心打たれた。訪れた人には、幅広い日本のメディア芸術の奥行きと多様性を感じ取ってもらうことはできたのではないか。中国から渡来した文物の多くが日本でそうであるように、我が国のメディア芸術が、中国で敬愛される文化へと昇華することを願っている。

映画祭、日中政府による相互開催への進展

文化部芸術文化課

このたび、文化庁では中国国家広播電影電視総局電影管理局との共催により、昨年三月に北京において日中国交正常化三五周年記念「２００７年日本映画祭」を開催。また八月に東京・新宿において日中国交正常化三五周年記念「２００７年中国映画祭」を開催しました。

日中国交正常化三五周年記念
「２００７年日本映画祭」
●会期：平成19年3月15日(木)～18日(日)
●会場：北京新世紀影院・北京新東安影城

映画を通じた相互交流として、三月一五日からの四日間、北京の中心街、王府井において、若い世代を対象とした日本映画八本の特集上映を行いました。開幕上映作品として『天国は待ってくれる』（二〇〇七年／土岐善將監督）を上映、その他『いちご同盟』（一九九七年／鹿島勤監督）、『がんばっていきまっしょい』（一九九八年／磯村一路監督）、『村の写真集』（二〇〇四年／三原光尋監督）、『ニライカナイからの手紙』（二〇〇五年／熊澤尚人監督）、『博士の愛した数式』（二〇〇五年／小泉堯史監督）、『ＨＩＮＯＫＩＯ』（二〇〇五年／秋山貴彦監督）、『雪に願うこと』（二〇〇五年／根岸吉太郎監督）の七作品、合計八作品を上映しました。

「2007年日本映画祭」開幕式：（左から）福田慶治ユニジャパン事務局長，加藤正人日本シナリオ作家協会会長，新藤次郎日本映画製作者協会会長，いしだあゆみさん，藤竜也さん，依田巽VIPO理事，根岸吉太郎監督，三原光尋監督

日本映画推進大使任命式

一五日の開幕式には、日本から訪中した映画関係者が登壇し、また、近藤文化庁長官（当時）と童電影管理局長より、フォ・ジェンチ監督と女優のゾウ・シュンさんに日本映画推進大使の証書が贈呈されました。

期間中には、小泉堯史監督、磯村一路監督、秋山貴彦監督、熊澤尚人監督、女優の多部美華子さん等多数の上映作品関係者が訪中、中国の映画ファンとの交流を行いました。

日中国交正常化三五周年記念
「２００７年中国映画祭」
●会期：平成19年8月31日(金)～9月3日(月)
●会場：新宿バルト9

中国での日本映画上映を受け、日本でも新宿で四日間の中国映画祭を開催しました。

今回の開幕作品は、日中合作映画の『夜の上海』（二〇〇七年／チャン・イーバイ監督）を上映、ほかに『美しきホームランド』（二〇〇五年／ガオ・フォン監督）、『恋人紐』（二〇〇五年／フォ・ジェンチ監督）、『トルファンの恋歌』（二〇〇五年／ジン・リーニー監督）、『天狗』（二〇〇六年／チー・ジエン監督）、『赤いネッカチーフをつけた二人の女』（二〇〇六年／ハン・ジーシュン監督）、『THE LAW OF ROMANCE（ロウ・オブ・ロマンス）』（二〇〇六年／シュ・ゲン監督）、『公園』（二〇〇七年／イン・リーチュエン監督）の七作品、合計八作品を上映しました。

中国からは、中国国家広播電影電視総局のウー・ケセンター長を代表として、電影管理局のジャン・シャオリンさん、映画脚本企画センターのスゥ・イさん、ガオ・フォン監督（『美しきホームランド』）、イン・リーチュエン監督（『公園』）、チャン・ジャンヤ監督（中国映画監督協会副会長）、ジュ・ユエンユエンさん（『天狗』主演女優）ら映画代表団が訪日し、開幕式に参加。日本側を代表し、青木文化庁長官をはじめ、開幕作品主演の本木雅弘さん、「日中文化・スポーツ交流年」文化交流大使の酒井法子さんらが歓迎の意を表しました。

また開幕作品上映では、主演の本木雅弘さんに加え、中国からヴィッキー・チャオさんが舞台挨拶に参加し花を添えました。

「2007年中国映画祭」ポスター

「2007年中国映画祭」開幕式

報告

北京の観客が心酔した日本舞踊と邦楽の共演

(独)日本芸術文化振興会
国立劇場芸能部副部長
古賀司郎

昨年一二月一二日午後七時三〇分、中国北京市郊外の海淀劇院で日本伝統芸能中国公演の幕が開きました。観客で満員になった会場は、これから始まる日本の伝統芸能の公演への期待と興奮で熱気にあふれていました。

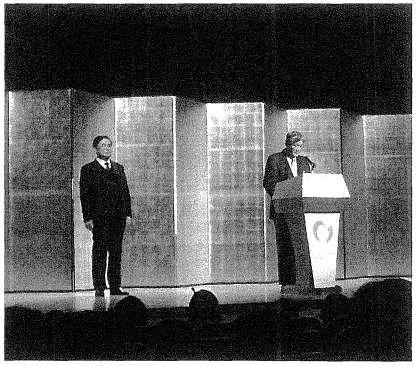
昨年、日中国交正常化三五周年を記念し、文化庁と独立行政法人日本芸術文化振興会（国立劇場）は中国対外文化集団公司と中国対外演出公司との共催により、日本の伝統芸能（日本舞踊と日本音楽）を国立劇場の企画制作により北京市で紹介することになりました。

日本舞踊『男女道成寺』に見入る客席

その第一歩は六月の北京市での劇場選定から始まりました。文化庁、国立劇場双方の担当者が北京に出張し、共催者である中国対外演出公司の担当者と中国側から提案のありました候補の劇場を調査し、一二月一二日の北京市郊外の海淀劇院での公演が決定されました。

北京の観客にわかりやすい演目選定

国立劇場では日程と会場の決定を受けて、舞踊と邦楽の担当プロデューサーを中心に公演内容の検討が始まりました。中国の観客に日本の伝統芸能をどのようにわかりやすく紹介し理解を深めることができるかをテーマに、さまざまな検討がなされました。その結果第一部を日本音楽（邦楽）のレクチャーコンサートとし、音楽研究家の小島美子先生の通訳つきの解説で、日本の三味線音楽を代表する唄い物の「長唄」と語り物「常磐津」の演奏と、「囃子」の楽器解説を交えて、日本の伝統音楽・邦楽の流れを、中国の観客の皆様にわかりやすくお聞かせすることにしました。



日本伝統芸能中国公演は青木文化庁長官（右）と李中国文化部副部長の挨拶から始まった

第二部は日本舞踊尾上流家元・尾上菊之丞師による日本舞踊の特質について、通訳つきの解説を交え、日本舞踊を代表する名曲『京鹿子娘道成寺』から変化した『男女道成寺』を上演することにしました。この作品は男女二人が華やかに踊る日本舞踊の美しさを堪能できる作品です。これに第一部で紹介した長唄、常磐津、囃子が掛け合いで演奏し、字幕表示も加えてこの公演の集大成をご覧いただくこととしました。

中国人民大学国際学習センターでの日本音楽・日本舞踊ワークショップ

所作台の「大燻蒸作戦」開始

その後、国立劇場の舞台監督を中心に、舞台スタッフによる北京市海淀劇院の下見調査を経て、舞台関係のさまざまな準備が始まりました。日本伝統芸能の舞台は日本独特の舞台装置を中心に、さまざまな備品を中国に持参する必要があります。中国側との密接な打ち合わせの結果、中国現地で調達できるものはできるだけ現地で製作等をお願いして用意してもらい、必要最小限の道具類を持参することにしました。その中でどうしても中国で製作できないものが、日本舞踊には欠かせない所作台と道成寺の鐘でした。これには特別の特許があって、日本から運ぶことになりましたが、所作台は木製のため、法律改正で燻蒸していないものは中国に持ち込めないという難問にぶつかりました。そこで持参予定の二三枚の所作台の「大燻蒸作戦」を開始しました。今回協賛していただいた近畿日本ツーリスト(株)と近鉄エクスプレス(株)の関係者の協力を受けどうにか期日までに間に合わせることができました。

半年の準備期間を経て一二月一二日を迎えました。今回の国立劇場の訪問団は、団長・津田和明理事長、副団長・織田紘二理事を中心に、解説に小島美子先生、振付・解説に尾上菊之丞師、舞踊は尾上紫さん、尾上青楓さんの姉弟、長唄は杵屋勝四郎さん、稀音家祐介さんほか、常磐津は常磐津初勢太夫さん、常磐津文字蔵さんほか、囃子は藤舎呂船さんほか、舞台スタッフも併せて総勢五七人の団員が参加しました。

中国人民大学でのワークショップ

朝から天候は晴れて公演日和になりました。この日の昼時間は在中国日本国大使館のご協力により、中国人民大学国際学習センターにおいて、中国人民大学外国語学院副教授・張昌玉先生を中心とした中国人民大学の要請により、一二〇人ほどの日本語専攻の学生を対象に、日本音楽、日本舞踊のワークショップが開催されました。

最初に中国人民大学共産党・斉暢書記による歓迎の挨拶があり、続いて国立劇場・津田和明理事長が友好の挨拶をしました。

この後約一時間半の時間で、長唄、常磐津、お囃子の解説と演奏、日本舞踊の扇を題材にした実技指導が熱心に行われました。通訳をしながらの解説でしたが、日本語の理解度が高い学生が多く、随所で通訳を聞く前に笑いや拍手が起こり、たいへん和やかな活気に満ちたワークショップになりました。日中友好の役割が十分に果たせたひとときでした。

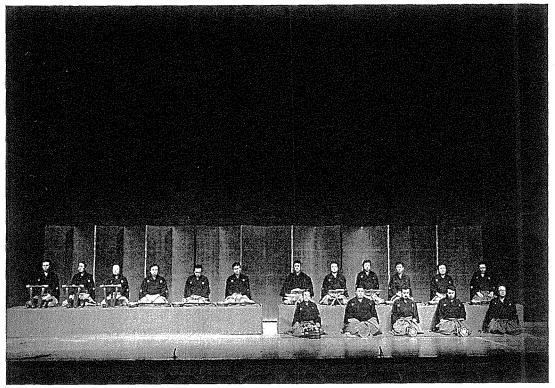
海淀劇院が日本の舞台に早替り

さていよいよ本番です。午後七時三〇分の開演に先立ち、青木保文化庁長官と李洪峰中国文化部副部長により本公演の成功と日中両

国の友好と発展を祈念する挨拶で日本伝統芸能中国公演がスタートしました。

第一部は三味線音楽の流れの解説と演奏です。

国立歴史民俗博物館名誉教授の小島美子先生により雅楽から長唄までに至る日本音楽の歴史がわかりやすく解説され、また三味線音楽のそれぞれの楽器が詳しく紹介されると、観客から拍手とさまざまな反応が伝わり、舞台と客席が一体となってのレクチャーコンサートになりました。



第1部邦楽レクチャーコンサート

一五分の休憩をはさんで第二部の開演です。

日本舞踊尾上流家元・尾上菊之丞師の日本舞踊のわかりやすいダイナミックな解説に続いて、『男女道成寺』の開幕です。最初は場内が真っ暗の暗転から、柝の音の合図と同時に一瞬の内に桜の咲き乱れる舞台と美しい二人の白拍子が現れると、歓声と拍手が沸き起こりました。白拍子花子役の尾上紫さん、白拍子桜子実は狂言師左近役の尾上青楓さんの息の合った華麗な舞踊に、又、長唄と常磐津の掛け合いの演奏と躍動感のあるお囃子の響きに観客は酔いしれていました。

第2部日本舞踊『男女道成寺』：尾上紫さん（上），尾上青楓さん

最後に二人が鐘の上下での見得をきめ終幕を迎えると、感動の大きな拍手が響き渡り、カーテンコールの中で大好評のうちに終了しました。日本の伝統芸能の奥深い素晴らしさが中国の観客に理解されこれを機会に友好と友情の輪が広がったと思われます。

最後に、本公演は日中両国の関係者の皆様の多大なご協力、ご後援のもとに開催する事ができましたことに心より感謝申し上げて、ご報告とさせていただきます。

―寄稿―

北京で見る「日本映画」

在中華人民共和国日本国大使館広報文化センター一等書記官　横井理夫

二〇〇七年は、日中国交正常化してから三五年目であり、両国がそれぞれ実行委員会を設け、日本側が中国において、中国側が日本において、それぞれ多様な行事を開催した。

二〇〇六年秋に安倍晋三総理（当時）が中国を訪問して以来、昨年春の温家宝総理訪日、同年末の福田康夫総理訪中と、日中の首脳レベルの相互訪問が順調に行われ、首都北京においても日中関係をさらに発展させていく空気ができあがりつつある。北京は、今年のオリンピック開催を控え、世界各国との友好関係構築に努めており、その前年に日本一国が突出してさまざまな活動を行えたのは、昨年が日中両国の記念の年であるというだけでなく、「戦略的互恵関係」という言葉で表されるように、日中両国が、アジア、世界の一員としての責任を担い、共に貢献し、その中で互いに利益を得て拡大し、両国関係を新たな高みへと発展させていくとの認識で首脳レベルが一致しているからであろう。中国国内メディアにおいても肯定的な日本関連報道が多くなされている。

昨年三月一五日から北京の繁華街において、日本文化庁、中国国家ラジオ映画テレビ総局共催による日本映画祭が開かれた。中国国内メディアも広く紹介した。特に、オープニング上映作品である『天国は待ってくれる』は、日本で二月に公開されたばかり。東京の若者の友情と愛情を描いたもので、石田あゆみさんの舞台挨拶があったことなどから取り上げられた。『雪に願うこと』は、経済発展した日本の風景として自然と都市を対比させ、家族愛を描いたものとして取り上げられた。人民ネットの娯楽面にも取り上げられているので興味のある読者はご覧いただきたい（http://ent.people.com.cn/GB/82222/42057/79214/index.html）。

近年、中国で公開された日本映画は、二〇〇五年『盲導犬クイール』、二〇〇六年『いぬのえいが』と年一本であったと聞く。昨年は、北京での映画祭に加え、上海でも民間レベルでの日本映画祭が行われ、これらの動きと併せて、劇場用映画も、『ドラえもん「のび太の恐竜」』（ドラえもんの映画は中国初）、『日本沈没』が公開された。さらに、今年一月には『ドラえもん「のび太の新魔界大冒険」』が公開されるなど増加の兆しも見える。日中が協力して製作される映画も増加傾向にある。これらは、関係者の方々の理解と努力の賜物といえよう。現代日本の生活を描く日本映画が数多く上映されるようになるにはもうしばらく時間はかかるかもしれない。

二〇〇八年は、北京オリンピックの開催年、かつ日中平和友好条約締結三〇周年であり、「日中青少年友好交流年」である。両国の青少年交流、相互理解を深めていくためにも、映画をはじめとする文化交流は不可欠な要素であり、微力ながら支援してまいりたい。

●3月号予告

◆長官対談◆
【文化の交差点】青木保文化庁長官対談
山崎正和　LCA大学院大学長、劇作家
【長官コラム　青木保のカフェ・アオキ】

◆特集◆
文化財としての戦後建造物
【文化庁提言】
文化財としての戦後建造物
【寄稿】
DOCOMOMOと戦後建築
消えゆく和風住宅の文化
戦後の土木建造物
【事例紹介】
国際文化会館の保存再生
庶民の町大阪のシンボル　通天閣
広島平和記念資料館・世界平和記念聖堂
【施策紹介】
文化財指定・登録された戦後の建造物

◆文化庁ニュース◆
文化審議会文化政策部会の中間報告
伝統文化こども教室フェスティバルinなら報告　ほか

◆連載◆
【いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート】
北海道立近代美術館
【芸術文化の風】
アートをマネジメントする
【著作権Q&A【著作権なるほど質問箱】から】
大学と著作権
【言葉を見つめて】
方言談話資料を利用して
【伝建地区を見守る人々　伝建歳時記】
一〇〇年ぶりの渡り初め（福岡県朝倉市）
【天然記念物の保護管理の現状】
天然記念物見島ウシ産地の現状と課題（山口県萩市）
【広げよう「文化力」の輪！】
青木長官トークサロン～渡辺貞夫さんをお迎えして～
【こどもの文化体験】
映画をとおして、生きることの意味を考える
【日本の伝統美と技を守る人々】
今井信子（雅号 秋山信子）・衣裳人形
【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
印刷文化を支えたもの～板木と活字～
【祭り歳時記　伝承を支える人々】
鹿島の祭頭祭
【文化交流使の活動報告】
名嘉睦稔・画家
【文化でまちづくり　明日への文化振興ビジョン】
おおさか文化プラン（大阪府文化振興計画）
【近代建築のある風景　活用の最前線】
三池港築港一〇〇年と船渠地区保存の取組

編集後記

二〇〇七年は日中文化・スポーツ交流年であり、文化庁として過去の比類なく、さまざまな主催事業を開催しました。海外支部のない文化庁が海外で行事を開催するということは、国内の場合と異なり、移動、コミュニケーション、経費等の課題が多く存在しました。しかし、幸いにして日中両国の大使館のほか、特に中国側の機関が中国側主催者として現地での采配に大きく尽力していただいたお陰で、なんとか開催・実施までたどり着くことができました。

文化や制度等の相違により、予想できないハプニングも少なからず起こりましたが、「日中両国の二国間の関係は重要」という大原則のもと、両国の関係者が調整に奔走し、国境を越えた密な連携があったからこそ、苦境を乗り越え成功裏に実施できたものとうれしく思います。交流年事業を通じて知り得た両国の関係者とは、これからも信頼できるパートナーとして支え合えることでしょう。（R）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等のチケットプレゼントは，
A　国立新美術館
「アーティスト・ファイル2008」
2組（ペア）
B　東京国立近代美術館
「近代工芸の名品」
2組（ペア）
C　国立国際美術館
「エミリー・ウングワレー展」
2組（ペア）
D　京都国立博物館
「雛まつりとお人形」
2組（ペア）
E　奈良国立博物館「お水取り」
2組（ペア）
です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ，2月22日（金）までにご投函ください（当日消印有効）。
＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報　2月号（通巻473）

平成20年2月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061　東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒167-8088　東京都杉並区荻窪4-30-16
電話　編集　03（3571）2126
販売　03（5349）6666
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち，意見にわたる部分については，筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円　送料76円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは，直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部広告課
電話03（5349）6657（ダイヤルイン）
2008 Printed in Japan　ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。